關山慧玄禪師の頂相について

荻須純道

一

關山慧玄禪師（一二七七—一三六〇）の行狀は正法山六祖傳によりその風格が窺える。禪師は外見や形式にとわれることなく、少しも世間的なものに煩わされることなく胸中眞に豁達なるものがあつた。讀經儀式にも拘泥せず、殿堂の莊嚴も意に介せず而も枯淡な日常であつた。然しながら門下育成のためには涙のにじむ大慈悲の程が窺われ、而もまた惡辣の鉗鎚は到底上根の器でなければ堪え得るものでなく、多くの門下中唯一人授翁宗弼のみを法嗣として打出されたことは周知の事實である。寔に禪師は伽藍も儀式も意とされず、佛法そのものに透徹され、傳燈の嚴肅さを示めされている。禪師には「慧玄這裏無生死」「柏樹子話有賊機」等の法語の他か別に語錄といつたようなものもなく、肖像といつたようなものもない。唯佛法そのものの久住のために、傳燈の嚴肅性を實踐された。

二

いまこゝに論述しようと思うのは頂相の問題である。正法山誌の記すところによれば、禪師は遺命して肖像を留めしめず、日峰宗舜（一三六八—一四四八）に至り開山像を設くべきのことが論ぜられ、これが實現したのは雪江宗深（一四〇八—一四八六）の時であつたというのである。乃ち文明二年（一四七〇）雪江が禪師の頂相に贊をしたとされる

「關山國師尊像贊」によれば、當時まで妙心寺の開山堂にたゞ牌が建てられているのみで、祖像は安置されていなかつたことを知るのである。これが日峰宗舜に至り妙心寺が中興されるに當り、祖道精神が高められるために、或は又中世佛教に共通に見られる祖師の人格中心の在り方からも一門の人々には切實に感ぜられ、また要請された問題であつた。

これは遺誡の問題にも關連して考えさせられることではあるが、關山派の人々が如何に祖道の顯揚に力め、苦難の道を歩みつゝ佛法護持の熱意に燃え、外的勢力に拮抗しつゝ祖塔の復興に志したかということに思いを回らさなければならない。

室町幕府は皇室と因縁の深かつた大德、妙心の兩寺に對しては制壓を加えていた。「本朝無双の禪苑」とまでいわれた大德寺は、義滿時代五山十刹の制度が確立した時には京都の十刹の第九位に置かれたし、妙心寺の如きは山隣派と稱し十刹の中にも數えられなかつた。偶ゝ應永の頃妙心寺に拙堂宗朴（授翁の嗣）が住山し、この拙堂が、幕府に反旗を飜して大内義弘に師檀親交の關係があり、義弘に黨して軍中に馳突したとのかどで、妙心寺は幕府のために彈壓されるに至り、寺領は沒收され、寺は靑蓮院の管轄に歸した。そして拙堂は捕えられ靑蓮院に幽閉さるること三年であつた。當時靑蓮院門跡であつた義圓（後の還俗將軍義敎）は俗叔で南禪寺の德雲院に住していた延用宗器に妙心寺並に寺領七所を與えたため、延用は妙心寺を「龍雲寺」と改め德雲院の末寺とした。こゝに於いて妙心寺は中絕したことになるが、五山に傳つた關山派の南禪寺正眼院にいた根外宗利（雲山宗峨の嗣、鎌倉天源庵、禪興寺等に住す）が延用より關山派の祖塔微笑塔の敷地を讓り受けたのは永享四年（一四三二）のことである。中央の壓迫を受けて濃尾に關山派の基盤を固めつゝあつた犬山瑞泉寺の日峰宗舜が一門の人々に懇請され祖塔復興のために上洛したのはこの時である。「正法山荒虛となるもの舊し。唯微笑の一塔巍然として存するのみ。師拜瞻して目を擧ぐるに忍びず。是に由つて日々衆を率いて普請す。瓦礫を拾ひ荊榛を拔き百計して作新す」との正法山六祖傳の記述は、日峰の心情

察するに餘りあるものがある。

三

かゝる事情のもとに祖塔復興に專念した日峰は祖道精神昂揚のためにも祖像の必要を感じ、これが作成を計畫した。然しもともと關山慧玄禪師には據るべき頂相はない。

川上孤山師の妙心寺史、天岫接三師編集の妙心寺六百年史には授翁が禪師の畫像を作り自贊を求めたため一語を書かゝれたと附記しているが、これは妙心寺に現存する禪師の頂相に雪江が誌したといわれる贊にも「吾祖禁頂相遺囑一代奇範也」といつた詞から推しても、また禪師の御性格から考えても、授翁の求めにより像の上に自贊したということはなかつたと思ふ。

このことは龍華の無著道忠が正法山誌に

關山自贊

匝地清風關山月。一轉大燈高照重光圓。明靑寥廓絶雲翳。萬象之中獨露身。

聖澤院古記中。錄二松源虛堂大應已下列祖自贊一。而此贊在二其中一也。夫レ知關山祖師所二自作一乎。雖レ不レ成二韻語一。亦足レ驚二心目一焉。按二大德綸旨一。延文四年四月十七日。正燈上加二高照二字一。關山祖師遷化。在二延文五年十二月一。則此贊可レ在二延文四五之間一而已。然此自贊之像無二所在一矣。矧雪江和尚叙二關山祖師遺誡一云。切莫レ寫二余頂相一焉。由レ此則關山可レ不レ贊二自像一也。恐後人圖レ像信レ筆亂道歟。固不レ足二襲藏一也。

元祿十二年閏九月十四日　　釋道忠識

とあり、聖澤院の古記の中に松源、虛堂、大應以下列祖の自贊があり、その中に禪師の自贊があつたことを無著道忠は知つたのであるが、この贊中に高照の二字は大燈國師の諡號である。大燈國師に「高照」の加諡があつたのは延文

四年であり、關山慧玄禪師の示寂は延文五年であるから、禪師の自贊とすれば延文四、五年の間という推定がなされるわけである。然し自贊された肖像の所在が明かでない。また雪江が誌す如く禪師が頂相を禁じた遺訓から推し考えても「關山自贊」ということは考えられない。恐らく後人の作であろうと無著は述べている。

無著道忠は「關山自贊」に關し疑問をもち、後人の作と推定したのであるが、これを裏付けるべきものが建仁寺塔頭常光院に「松源十祖の像」として現存している。「松源十祖」とは松源崇岳、運庵普巖、虚堂智愚、南浦紹明、宗峰妙超、關山慧玄、授翁宗弼、無因宗因、春夫宗宿、溫中宗純の十祖をいう。これは妙心寺とは別に五山に傳つた關山派を意味する。

妙心寺が室町幕府の壓迫を受け、中絶すること三十餘年、寺名も龍雲寺といわれる悲運に遭遇した頃、五山には關山派の流を汲む春夫宗宿という禪僧があつた。春夫は無因に嗣法した人で、筑前の崇福寺に出世し、後京都に普門山福聚院（建仁寺搭頭今は常光院に合併）を開いて閑休した人で、松源一流の禪を擧揚するとともに、また持律緊嚴な禪僧であつた。[一]嗣法の弟子には「關山慧玄禪師遺誡」の流傳に深い因緣を持つ溫中宗純を打出している。

關山慧玄禪師頂相（春夫宗宿贊）
（建仁寺塔頭常光院所藏）

關山派の祖塔が他山他派の管理に歸し、妙心寺中絶といつたような苦い經驗を持つ春夫には堪えられないものがあつ

たであろうし、また一方五山に盛榮する他流に互して松源一流の佛法を擧揚して祖道意識を高調する必要があつた。この「松源十祖の像」も恐らく春夫によつて松源列祖の肖像が計畫され後に溫中を入れて十祖として完成襲藏されたものと思われる。

この松源十祖の像は各列祖の像を模寫して製せられたものであるが、關山慧玄禪師に至り、模寫すべき肖像が無かつたと思われる。そこで春夫は一圓相の上に贊をして

匝地清風起、關山月一輪、大燈高照、重光圓明、青天寥廓、絕二雲翳一、萬象之中獨露身

　永享辛亥菊月日、法孫比丘前崇福大宿焚香稽首拜贊

と誌したのである。大宿というのは春夫宗宿の別名である。そしてこの永享辛亥は永享三年（一四三一）であり、根外宗利が南禪寺德雲院の延用宗器より微笑塔の敷地を讓り受けた前年である。これによりて見れば前述の無著道忠が正法山誌に所載している「關山自贊」は贊語から文字の誤りがあることが認められる。そして無著道忠が見たという聖澤院の古記錄が誤寫されていたのではなかつたかと推察される。從つて正法山誌記載の「此自贊之像無二所在一矣云云」というたようなことも自ら解決されることである。

四

祖像の安置を念願した日峰は文安五年（一四四八）正月二十六日に示寂したが、それより二十二年を經た文明二年（一四七〇）に至り雪江は關山慧玄禪師頂相の贊詞を誌している。その贊詞によれば

還老和尙者　朕曾參　國師禪得大休歇旨未敢能發轉格外之玄機
龍寶開山國師之上足也　文保天皇在位後居　花園離宮時　國師微恙　上皇遣勅使　詔曰　國師今付大法者既是多其內誰是尤得大機大用者須承的旨　國師百年後猶敲其奧　國師云有慧玄藏主者老漢室中所接出　第一神足也實承當得

松源之骨髓矣天然以風顚故居處不定吾滅後宜尋出以商略向上宗乘也　上皇復詔國師曰　朕捨離宮欲爲禪宮伏賜山號寺號特請　關山以令爲住持　國師卽應　詔山云正法名寺妙心蓋以準梵王昔獻花日大迦葉破顏之故事亦所以請師兄貴正脈者也　勅使還奏　上皇　上皇大悅也　國師入滅後　上皇遣使請斯和尙於濃之山村住本山參徒亦隨至室內只棒雨喝雷耳於此　上皇亦山中刱　玉鳳院而居之以旦夕鍛錬　叡信增厚竟爲　開山祖住世八十四年間開作家鑪韛下惡辣鉗鎚底大宗匠也臨示寂囑嗣法的子弼授翁曰吾溘然後汝專以本分事接四來衲子而合振起　林際正宗切莫寫余頂相授翁謹任遺囑所以　開山祖塔號微笑塔中只建牌也滅後七十年後第四世嫡孫　舜日峯住院到再興斯寺時謂諸徒曰吾祖禁頂相違囑一代奇範也雖然末代兒孫以甚爲憑據但須命畫師令圖大方尊宿之體裁也況其佛與菩薩形像何敢憑其模範以爲必哉須是以相好甚嚴爲最也今據曲彔握竹篦凜然威風逼來學之　尊像者從嫡孫自由三昧應現矣夫斯之謂　妙心開山關山和尙者也哉旹文明二稔龍集庚寅孟秋日正法山主拙孫比丘宗深焚香九拜謹記祖師大略云是皆門下老宿所語可謂揚家醜也。(2)

とあり、正法山誌によれば無著道忠の時代にはこの贊詞は爛脱して讀むことが出來なかつた。そこで貞享四年(一六八七)表裝を改修した時一山諸老宿の間に文字補塡のことが議せられ、無著道忠がこのことに當つた。無著は數日沐浴して妙心寺の寶庫に藏する開山の硯墨を用いて、像上に淨紙を布徧し氈席を展覆し登跪して塡墨したところ、文字は皆完全に讀むことが出來るようになつた。この時乾瑞座元という人が副寺であつたといつている。その後正德五年(一七一五)默雲禪宜がこの贊詞を書寫して頂相が襲せられている。(3)

文明二年、雪江により關山慧玄禪師の頂相に贊詞が誌され、また文明五年には西宮海淸寺所藏にかゝる禪師頂相の贊詞が雪江により誌されている。妙心寺所藏の頂相は全身が曲彔に據る像であり、海淸寺所藏のものは半身像である。無著は正法山誌に

文明癸巳其第五年也在二後土御門之治一。妙心像贊在二文明第二年庚寅一、後四年書二海淸贊一時少有二改竄一矣。(4)

といつているが、この頂相の賛が妙心寺所藏のものと海淸寺所藏のものとは、同じ雪江が書いても、誌した時が異なれば文章に相違のあるのは當然であり、「有改竄」とはいえない。無著は妙心、海淸兩寺所藏の頂相の賛詞の相違を綿密に正法山誌に記している。

それよりも無著が雪江の誌した賛詞を塡墨して讀んだというが、恐らく不用意のため正法山誌に上載する妙心寺所藏の「關山國師尊像賛」には

國師（大燈）入滅後。上皇遣レ使請二斯和尚於濃之山村一住二本山一。參徒亦隨侍國師。至二室內一只棒雨喝雷耳云云(5)

とあり、「侍國師」の三字が竄入しているのである。大燈國師滅後、關山慧玄禪師が美濃の伊深より招請され本山卽ち妙心寺に住したのであるから「侍國師」の國師は禪師を意味するものである。禪師が初めて「本有圓成」の國師號を得たのは後奈良天皇の弘治三年（一五五七）であり、この賛詞が書かれた文明二年（一四七〇）より八十七年も後のことである。それ故こゝに「國師」というのは穩當でない。而も正法山誌には一言もこのことには觸れていない。明和二年（一七六五）可山禪悅の編纂した佛日眞照禪師語錄卽ち雪江語錄には海淸寺所藏の像賛を採つているから、このことの傍證にはならない。

川上孤山師の妙心寺史には「妙心寺所傳の全身像の賛中、雪江の原本には上皇遣レ使、請二斯和尚於濃之山村一住二本山一、參徒亦隨侍、國師至二室內一只棒雨喝雷耳云云の語がある」としているが、雪江の原本である全身の賛には「侍國師」の三字はない。のみならず原本には「朕曾參　國師禪、雖得大休歇旨、未敢能發轉格外玄機」の語は本文の中になく、賛詞を書き初めた空白のところに後に雪江が書き添えたものであろう。妙心寺所藏にかゝる「雪江和尙筆關山號」(6)の墨蹟には本文の中にこの語があり、また文明五年に誌された海淸寺の「關山國師尊像賛」(7)にもこの語が本文中に誌されている。では何故原本と異る妙心寺所藏の「關山國師尊像賛」を無著は正法山誌に所收したのであろうか。無著が原本に塡墨したのは貞享四年（一六八七）であつた。後正德五年（一七一五）默雲禪宜の筆跡で原本の寫しの畫像

が製作された。これには雪江の筆になる「關山號」や海淸寺所藏の「關山國師像贊」の文詞を勘案してか、贊詞の本文の中に「朕曾參 國師禪、雖得大休歇旨、未敢能發轉格外玄機」の語が挿入されている。無著の示寂は寛保四年（一七四四）であるから無著はこれによつたのではなかろうか。それにしても「侍國師」の三字は默雲の筆蹟中にもないのである。

この「關山國師像贊」は妙心寺の全身像と海淸寺の半身像はともに雪江が贊詞を誌したことは明かであるが、たゞこゝに疑問とするところは、無著道忠は正法山誌に

關山國師遺命不レ留二肖像一、到二五世日峰一、論二可レ設レ之義一。六世雪江承二日峰之意一、畫二一聖僧像一。以爲二關山國師像一。事見二于本山開山畫像上雪江和尙贊詞一。

といゝ、またこの頂相に關する見解を述べ、「日峰が畫工に圖せしめて、未だ贊詞を題せしめなかつた」のではないかという意見に對しては、若し日峰が圖を設けたなら雪江を待つまでもなく日峰が自ら贊をしたであろうし、また雪江が誌した贊詞の中に、日峰の時この頂相が初めて畫かれたという詞もないから、日峰の設けたものではないといつている。なる程雪江の贊をした「關山國師像」は畫も雪江の時に畫かれたと推定されるかもしれないが、尙殘る問題は雪江以前に關山慧玄禪師の頂相があつたということである。

瑞溪周鳳（一三九二—一四三三）の臥雲日件錄長祿三年十月七日の條によれば

十月七日赴二西芳寺一府君齋伴。齋罷。府君池水乘レ舟。歷二覽紅葉一。經二數刻一而還駕。歸路過二花園退藏庵一。尋二宗燈西堂一。燈引入二花園妙心寺客殿一。殿中掛二大燈國師像及關山像一。大燈作二關山號頌一曰。鎖二斷路頭一難レ透處。寒雲長帶翠嶺峯。韶陽一字藏レ機去、正眼看來隔二萬重一。(9)

とあり、瑞溪周鳳が西芳寺よりの歸途妙心寺へ立寄つた時、妙心寺の客殿に大燈國師の像とともに禪師の像が掛けられていたことを記している。大燈國師の頂相とこゝに記される關山號の頌は後間もなく起つた應仁、文明の亂にも雪

江の努力によつて難を避け現存している。この長祿三年（一四五九）は雪江が「關山國師像贊」を誌した文明二年（一四七〇）より十一年前のことである。これにより考えれば無著道忠が正法山誌に記す如く日峰の時、單に祖像を設くべしという計畫だけでなく、少くとも日峰、義天の時代に祖像が出來ていたのではなかつたかと推察される。然し雪江の贊詞が誌されている頂相、即ち雪江以前よりあつた頂相に雪江が贊を誌したものであるか否かはわからない。

五

次に微笑庵（妙心寺開山堂）に安置される「關山國師尊像」について一言すれば正法山誌には次の如く記されている。

今微笑庵木像。初雕造時無面相可據矣。忽有一老婆。袱一物來云。不欲買佛像耶。衆取之開袱覽之。一祖像之面首也。一衆買之以爲神投。即用爲開山祖像面首。造足肩趺矣。是故此像清擬尊嚴。不似雪江之所畫者。像裳內記云。大永八年。(10)

これにより見れば現在開山堂に安置される木像の「關山國師像」は雪江の時祖像の面首を得て、後大永八年（一五二八）に至り祖像が造られ安置されたものと思われる。應仁の亂起るや雪江は亂を避けて丹波八木の龍興寺に逃れた。雪江の撰する正法山妙心禪寺記によれば「一日凶虜大いに山門を襲い堂舍を破り、林丘を屠り、悠忽の間に寺は曠墟」となつたことを知るのである。この時雪江は「大燈印證」の墨蹟とともに祖像の面首を抱いて戰亂を避けた如くである。正法山誌によれば

微笑庵災　妙道曰。昔時妙心寺係兵燹。而微笑庵巍然而免。其後雪江之時又火災。是時微笑亦遇災。于時雪江和尚。抱開山像首及大燈印證墨蹟。奔遯丹波大田龍潭寺。(11)

とあり、應仁の兵火に微笑庵は燒失した。龍潭寺とあるのは龍興寺の誤りであろう。然しながらかくの如き悲運にあ

いながら雪江は心中微動することもなく門下を誡め復興の心旺んなものがあつた。

時老衲避兵火逃於丹之米山。忽聞華園廢莞爾而笑且謂衆言。二三子忽歎焉。是細事也。夫昔法皇革離宮爲禪刹。宸衷於今赫々然。諸聖龍天不敢護惜也乎。萬乘願輪杲日麗天終無成滿期也。興廢有時華園不復春也乎。皇運法運一時勃興可翹足而竢矣。云云(12)

文明七年（一四七五）雪江は四來の衲子を接待するの外、宜しく修造を以て念とすべきことを遺誡し、かくして復興の運に向つた。（雪江錄）祖像を安置する現存の微笑庵は大永元年（一五二一）玉鳳院とともに造營されている。正法山誌の語るところによると東福寺の古殿を買い求め塔前の堂としたという。

微笑庵嘗改葺瓦。古瓦中有款識、作東福寺三字。而東字在在。蓋古我山買求東福古殿。爲塔前之堂耳。牧水座元。源癸　即住座元。大心　親覽其瓦云。(13)

さてこの微笑庵に安置された木像の「關山國師像」は初め彫刻に當つて據るべき肖像がなかつた。それで雪江が畫像の贊詞にいう如く相好の甚嚴なるものを願つていた。たまたま一老婆の將ち來つた一祖像の面首を神授となし、これを祖像の面首とすることに雪江は決定した。この面首を雪江が得たのは應仁の亂前のことであり、雪江がこの面首を抱いて亂を避けたことは前述の如くである。

この面首を「關山國師像」の面首として祖像が彫造されたのは大永八年（一五二八）であつたことは正法山誌にも記されているところであるが、花園遺臭錄(14)に次の如く記されている。

開山國師木像裳之內邊橫書云

奉彫刻關山和尚尊像大永八戊子八月吉辰

願主　宗韶

當侍眞　等怡

とあり、一行に二字又は三字づゝ文字を並べ、彫刻されている通りに記されている。願主宗韶という人は大永の頃妙心寺納所職であつた。[14] 因に現存する祖像の椅子は寛文四年（一六六四）に造られたもので、同じく花園遺臭録に「開山尊像椅子背板書云」として次の如く記している。

　奉牀凳壹個修造以架乎
開山國師遺像　　伏冀
法會儼然　不異迦文在世
禪牀確乎　直到慈氏下生
　寛文甲辰九月良辰　拙孫比丘恢門周節百拜

寛文甲辰は寛文四年である。

六

上來妙心寺開祖關山慧玄禪師の頂相に關する檢討を試みて來た。結局禪師には據るべき肖像もなく、頂相を殘さぬよう遺命されたとも傳えられているが、日峰が祖塔復興のためには祖像安置の必要があつた。それは祖道精神高揚のためには、生ける祖師に仕える如く祖師の人格を中心に關山派が結集されなければならなかつた。

關山派の人々が、幕府の彈壓を受けつゝ濃尾に法幢の樹立をなし、五山派の人々に互してその傳燈を護持したとしても祖塔が他山他門によつて管理されることは悲痛な問題であつた。五山に流れた關山派の人々が祖師の遺誡を秘かに守り傳え、先に述べた如く春夫宗宿が松源一流の傳燈を明確に認識するため松源列祖の頂相を作ろうとしたことなど、傳燈意識の强きものがあつたことを看取することが出來る。而も關山慧玄禪師には何等肖像は殘されていない。春夫は止むなく一圓相の上に贊をするより致方なかつた。

かゝる事情のもとに日峰が祖塔復興に當つては祖師の頂相を作る必要に迫まられ、只相好甚嚴なれば可なりとし、やがてこの理想は雪江に至つて實現したと見ることが出來る。この祖像頂相にいさゝか考察を試みた。

（昭和二十九年六月十二日、關山祖師毎月忌の日これを記す。）

註

（1）延寶傳燈錄　卷二十八

（2）妙心寺所藏　雪江和尙贊「關山國師像」、妙心寺名寶圖錄所收（昭和十六年六月發刊）

（3）妙心寺所藏「關山國師像」

妙心寺六百年史にはこの像を圖版として載せている。

（4）正法山誌　第二卷

（5）正法山誌　第二卷

（6）雪江和尙筆關山號　妙心寺所藏

妙心寺名寶圖錄、妙心寺六百年史等所收文中に曰く

關山

道老和尙者龍寶開山國師之上足也。文保天皇在位後、居花園離宮時、國師示微恙。上皇勅使詔曰、國師今付大法者既是多。其內誰是尤得大機大用者、須承的旨。朕曾參國師禪、雖大休歇日未敢能發轉格外之玄機。國師百年後尙扣其奥。國師云有惠玄藏主者老漢室中所接出第一神足也。實承當松源之骨髓矣。天然風顚故居處不定、吾滅後宜尋出以商略向上宗乘也。上皇後國師曰朕捨離宮欲爲禪宮、伏賜山號特請關山以令爲住。國師應詔、山號正法寺名妙心、蓋準梵王昔獻花日大迦葉破顏之故事亦所以請師兄貴正脈者也。勅使還奏上皇。上皇大悅也。國師入滅後、上皇遣使請斯和尙於濃之山村、住本山、參徒亦隨至、室內棒雨喝雷耳。於上皇亦山中𢫫玉鳳院而居之以旦夕鍛錬、叡信增厚、竟爲開山祖住世八十四年間開作家鑪鞴下惡辣鉗鎚底宗匠也。臨示寂囑嗣法的子弼授翁

雪江宗深

（7）關山國師尊像贊　雪江和尙筆　海淸寺所藏

這老和尙者
龍寶開山國師之上足也
文保天皇在位後居　花園離宮時　國師示微恙　上皇遣勅使　詔曰　國師今付大法者旣是多其內誰是尤得大機大用者速合承的旨朕曾參　國師禪雖得大休歇之旨未敢能發格外玄機　國師百年後須扣其奥　國師曰有玄關山者老漢室中所接出第一神足也實承當得　松源之骨髓矣天然以風顚故居處不定吾滅後宜尋出以商略向上宗乘也　上皇復詔　國師云朕捨離宮欲爲禪宮伏賜山號寺號特請　關山以令爲住持　國師卽應詔而山云正法矣寺名妙心矣蓋夫準梵王昔獻花日大迦葉破顏之故事兼所以請師兄貴正脈者也使還奏　上皇上皇大悅也　國師入滅後　上皇亦遣勅使請斯　和尙於濃之山村而住本山參徒亦隨侍室內只棒雨喝雷耳於此　上皇亦山中剏玉鳳院而居之以旦夕問道　叡信增厚竟爲開山祖住世八十四年間開作家鑪韛下惡辣鉗鎚底大宗匠也臨示寂屬嗣法的子弼授翁曰吾流然後汝但以本分事接四來衲子專合振起　林際正宗切莫寫众頂相授翁謹任遺屬　關山祖塔號　微笑　塔中只建牌也滅後七十年後到第四世嫡孫舜日峯再興斯　宮寺而住院時謂徒曰吾　祖禁頂相遺屬一代奇範也雖然末代兒孫以甚爲憑據但須命畫師令圖大方尊宿之體裁也剏其繪佛與菩薩形像何敢憑其模範以爲必哉須是以相好甚嚴爲最也今現半身應來學之尊像者從嫡孫自由三昧應現也夫這是謂　妙心開山關山和尙者也哉旹文明癸已孟秋日正法山主宗深九拜謹記　祖師大略以爲贊皆是門下所傳語也

(8) 正法山誌　卷一
(9) 續史籍集覧　臥雲日件錄長祿三年十月七日の條
(10) 正法山誌　卷一
(11) 同　書　卷六
(12) 正法山妙心禪寺記
(13) 正法山誌　卷八
(14) 妙心寺塔頭　玉龍院藏本
(15) 川上孤山師著妙心寺史上卷一九〇頁參照